

---

# 眠れる森のその奥で

tensuke

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

眠れる森のその奥で

### 【Nコード】

N7780E

### 【作者名】

tensuke

### 【あらすじ】

玉木宏さんをモデルにプリンセスならぬプリンス話を書いてみました。眠れる森の王子様です。

## 1・シンデレラ

### 1・シンデレラ

まだ 魔法やら妖精やらといった事たちが 当たり前のようにあった時代のお話です。

とある城に一人の王子がおりました。

すらりと伸びた手足がしなやかな長身の彼は 美しい顔立ちの少年でした。

長い睫に縁取られた大きな瞳は 目尻が優しいカーブを描き  
柔らかな薄茶色のまなざしは見るものを惹き付ける魅力に溢れていました。

細い鼻梁に続く唇は ふっくらとして紅く  
ほんの少しだけ彼の静謐な佇まいに艶めいたものを感じさせました。  
静かに造りもののめいたその美貌も 微笑むと浮かぶ深い笑窪が人懐こく幼くも見せ  
人々の心を魅了して止まないものでありました。

全ての人々に愛され慈しまれて王子はすくすくと成長してゆきました。  
た。

その幸せは永遠に続くかと思われたのに  
王子の母である王妃が 王子が17歳の時に病に倒れ亡くなりました。  
た。

王は二人の息子を持つ女性を後妻に迎えました。

二人の息子たちはそれぞれに20歳と22歳の青年でした。

王子は素直に二人の兄ができた事を喜び 継母にも心からの愛情を捧げました。

しかし 実母である先妻の面差しを映す美しい王子の姿に  
継母である王妃はことある事に冷たく当り ことさらに邪険に扱う  
のでありました。

二人の兄たちは 一目でこの美しい王子に心を奪われました。  
少女と見紛う王子の可憐な それでいてふとした時に纏う妖艶な佇  
まいに

すっかりと魅入られてしまったのでした。

継母の嫌うのもかまわず 二人の兄たちは何かにつけては  
王子にまとりついては そのすべやかな肌に手をふれようとしま  
した。

王子はその生まれ持った優しくも気高く誇り高い志をもって  
継母にも二人の兄にもできうる限りの敬意を示し

その手をむげに振り払うのではなく  
やんわりと しかし断固とした拒絶を繰り返しました。

それでも繰り返される 継母からの執拗な嫌がらせと  
二人の兄から強要されるあからさまに性的な求愛に

王子の心は疲れ果てておりました。

それに追い打ちをかけるかのように ただ一人 王子をかわらず愛  
し慈しんだ

父である王が 病に倒れ あっけなくその命を落としたのです。

城の中 すっかりとその実権は継母である王妃が握り

王子は追われるように城の中でも一番小さな部屋へと押し込められ  
ました。

継母である王妃にたてむかえる者はなく

王子に優しくかった使用人たちも やむなく王妃のいいなりになるの  
でした。

貧しい食事しか与えられず 貧しい身なりにそのしなやかな肢体を包み

それでも溢れる気品と美しさは損なわれることなく

王子は ただ静かに自分に与えられた状況を冷静に受け止めておりました。

城の中を自由に歩く事も許されず 狭い部屋に軟禁されたも同然の日々

王子の楽しみは 唯一 部屋の窓へとやってくる小鳥たちの囀りでした。

いつしか王子は小鳥たちの囀りと語り合える程になりました。

そんなある夜

王子は暗い部屋の中 人の気配を感じて目を覚ましました。

固く身構えてベッドに半身を起こした王子の目に映ったのは

手に手に細いロープを持ち 迫り来る二人の兄の姿でありました。

細く響きそうになった王子の悲鳴は 長兄の手でその柔らかな唇が覆われ

続く何やら布のようなものに口を塞がれ消えてゆきました。

渾身の力をこめて抗うものの 年長でもあり身体も大きな二人の男に組み敷かれ

王子はその身体をベッドへと押しつけられその自由を奪われました。

手にしたロープで王子の手足の自由を奪うと 二人の兄は夜目にも判る

下卑た笑いを浮かべ それぞれに自らのシャツを脱ぎ去りました。

自分に降りかかるうとしている事態を知り 王子の大きな瞳は

これ以上ない程に恐怖に見開かれ うっすらと涙さえ浮かびました。

二人の兄はゆつくりと　なぶるように王子のシャツを剥ぎ取ってゆきました。

下着ごとそのズボンさえも引き下ろされ

王子は兄たちの前に　その美しい肢体をさらすことになりました。舌なめずりの音が聞こえそうな兄たちの表情に耐えきれず

王子はその瞳を固く閉ざしました。

二人の兄たちの手が　王子の身体の上を這い回り　その肌を撫で回しました。

立ち上るように湧き上がる嫌悪感に身を震わせて　王子はそれに耐えました。

長兄の手は　王子の胸板に艶めかしくも美しく飾られた珊瑚色の突起を弄び

次兄の手は王子の身体の中心をやんわりと揉み扱くようにまとわりつきました。

布に覆われた王子の口からは嫌悪の叫びが小さく吐き出され続けました。

それでも兄たちの動きが止まる事はなく

ついには次兄は王子のやんわりと形を変え始めた屹立を

ゆつくりとその口に含み　まるで砂糖菓子でも味わうように舐め回し始めました。

ねっとりとした粘膜に包まれた生暖かい感触に　王子は短い悲鳴をあげました。

自分の意志とは関係なく追い詰められてゆく屹立が真珠の滴を零しました。

長兄は王子の後孔へとその指を潜り込ませようとさぐり王子に新たな悲鳴をあげさせました。

つつましくその入り口を閉ざした王子の蕾は長兄の指を拒み震えま  
した。

何かヌルヌルとした感触に 長兄が指を何かに浸していた事が判り  
ました。

その滑りを借りて 長兄の指は王子の蕾を押し開き奥へと押し入っ  
てきました。

王子はたまらずその腰を浮かせ逃れようともがきました。

その動きは 王子の屹立を口に含んだ次兄の動きを助ける事となり  
深い快感の波に王子はのまれそうになりました。

その身体の構造上 気持ちや心は置き去りのまま ただ押し寄せる  
快感に

王子はその思考回路が白く濁ってゆくのを感じました。

長兄の指が蕾の奥のある一点を掠めた時

王子は激しい愉悦に襲われました。

王子の瞳からは涙がこぼれ落ち その滑らかな頬に伝いました。

逃れられない

心が萎えてゆくを感じながらも王子は残る理性を握りしめて耐え  
ました。

追いつめられる己の身体が千々に砕け散ってゆくような恐怖に戦き  
ながら

いつそ このまま意識を手放してしまえたらと迫る快感を受け入れ  
ました。

王子は次兄の口内にその高まりを解き放ちました。

次兄を押しつけるようにして王子の足の間に割って入った長兄の  
固く昂ぶったものを蕾に押し当てられ

身体を開かれてゆく感触に全身を震わせて王子は叫びました。

王子はその意識を手放したのです。



## 2・白雪姫

### 2・白雪姫

翌朝

目覚めた王子は自分が見るも無惨な姿でベッドに横たわっている事に愕然としました。

引きちぎられたシャツの残骸がまとわりついた胸元  
拘束されていた手足にはひどい赤紫色の痣が残り

乱れた寝具に飛び散った白い飛沫の残骸

己の身体のあらぬところに激しく残る違和感と痛み

そして　ようやく身を起こした身体の激しいだるさと熱っぽさに

王子は昨夜の出来事が夢ではなかったのだと知りました。

悪夢であってほしい

そう思った王子の思いは打ち砕かれました。

王子は　二人の兄に陵辱されたのです。

認めたくない　信じたくない事実により王子ははらと涙を零しました。

身体の痛みよりも　碎けて壊れてしまった心の痛みの方が勝りました。

王子はベッドにつつぷして声もなく泣き続けました。

一方

二人の息子の行為を知った継母は怒りに震えておりました。  
王子への怒りにです。

愛する息子をたぶらかした淫乱な王子

前妻に似た美しい面差しも　何もかもが許せない。

王妃は金を積んで一人の男を雇いました。

王子を森へと連れ出して殺して欲しい  
その心臓を持ち帰ってくれば いま一層の金を払おう。  
王妃はそう約束して男に王子を託しました。

悲しみにうちひしがれた王子は 抗う力もなく男に引き立てられて  
城を出ました。

男は王子を城を取り囲む深い森へと連れて行きました。

王妃に金で雇われたこの男もまた 王子の美しさに一目で心を奪わ  
れました。

殺してしまうのは忍びない

男は王子の唇を散々に奪うと思うままにその身体を撫で回しました  
しかし その身体を繋ぐ事はせず 突き放すように森の奥へと放り  
出しました。

男は恐かったのです。

王子を抱いてしまったら 自分が果てしない海の底へ沈んでしまう  
ようで

それ以上 王子に手出しをする事ができませんでした。

傷つき 弱り果てた王子ではありませんが

それでもその気品と他を圧倒する気高さは損なわれる事はなかった  
のです。

男は近くにいた子鹿を撃ち殺すとその心臓を持って城へ戻りました。  
王妃は男の持ち帰った子鹿の心臓を王子の心臓と信じて満足しまし  
た。

二人の兄たちは母に掴みかからん勢いでもの申しましたが  
すでに王子は深い森の奥へと置き去りにされた後でした。

王子は 自らの容姿が またその纏った雰囲気までもが  
男たちの心を震わせ惑わせ狂わせる事を知り

その事実には砕けた心を取り戻せずにおりました。

思いもしなかった出来事に

己の身の上に降りかかった災難を どう受け止めてよいのかさえ  
思いあぐねておりました。

あてもなく森の中を彷徨ううちに 王子は一軒の小さな小屋を見つ  
けました。

疲れ果てていた王子は 迷うことなくその小屋の扉をノックしまし  
た。

中からの答えはなく 押した扉は施錠の気配もなく開かれました。  
王子は小屋の中へと入ると そこにあった小さなベッドに身を縮め  
て横たわりました。

あつというまに深い眠りへと落ちた王子は ほどなくして  
自分を取り囲んだ小さな人影たちにも気づく事はありませんでした。

身を縮めて眠り続ける美しい王子を見つめていたのは

小さな7人の小人たちでありました。

彼らは森での仕事を終えて小屋へと戻り 眠る王子を見つけました。  
その美しさに小人たちは王子の眠りを覚ます事さえ忘れて見つめて  
おりました。

ほどなくして 小さなびと共に王子がその目を開けました。

自分を取り囲むようにして覗き込んでいる小さな人達の姿に

王子は一瞬とても驚き その薄茶色の大きな瞳を一杯に見開きまし  
た。

王子は留守中に勝手に小屋へと上がり込んだ事を詫びると

小人たちにこれまでの出来事を語って聞かせました。

王子を知る森の小鳥たちが小人に 王子が悪人ではない事を主張し  
てくれたお陰で

小人たちは王子を疑う事なく受け入れてくれたのでした。

小人たちは恐ろしい城の継母を魔女に違いないと言いました。二人の兄たちも おそらくこのまま王子を諦めるとは思えないだから この小屋から決して外へ出てはいけないと言いました。小人たちが仕事へと出かける間 留守番をする王子は森の動物たちと心を通わせて過ごしておりました。そうやって過ごすうちに 打ち砕かれた王子の心の傷も少しずつ癒されてゆきました。

そうやってどの位の日々を小人たちの小屋で過ごしたでしょうか。王子は身体の傷も癒え すっかり元気を取り戻しておりました。そんなある日の午後 いつものように小人たちの留守を守り 小屋の掃除をすませ 簡単な食事の用意をした王子は 小屋の中で静かに本を読んでおりました。

ふと 小屋の扉を叩くノックの音に気づき 王子は小さな覗き窓から外を窺いました。

そこには 背の曲がった小さな老婆の姿がありました。それは 小人たちの言った通り魔女であつた継母がその姿を変えて訪れたものでした。

魔女は城にある魔法の鏡を使って王子を探し出したのです。

鏡は「世界で一番美しいのは 森の小人の小屋にいる王子です」と魔女に応えたのでした。

王子を憎む魔女である継母は 老婆に姿を変え 毒を含ませたリングを持ってこの森の小屋へとやってきたのでありました。

そうとは知らない心優しい王子は 何事か困った様子の老婆につられ その扉をあけてしまいました。

「おばあさん どうかありませんでしたか？」 王子の柔らかな声に老婆は応えました

「お水を一杯恵んでもらえませんかいいね？」 王子は優しく微笑むと小屋へ戻り

コップに一杯の水を汲んでもどってきました。

「どうぞおばあさん」

「ありがとう やさしい少年だね」 老婆は黄色い歯を見せて笑いました。

そしてコップの水を飲み干すと 王子に向かってひとつの紅いリングを差し出しました。

「お礼にこのリングをあげるよ お食べ」

そう言つて 老婆は小屋から遠ざかり 森の奥へと消えてゆきました。

王子は何を疑うでもなく 老婆が置いていったリングをシャツの袖で軽くこすると

一口迷うこともなく嚙り口に含んだその瞬間

王子は音もなく床へと崩れ落ち その手から嚙り掛けのリングが床へと転がりました。

## 2・白雪姫（後書き）

感想・ご意見など頂けますと励みになります  
よろしくお願い致します

### 3・美女と野獣

#### 3・美女と野獣

倒れた王子の様に　小屋の周りにいた森の動物たちが騒ぎ始めました。

小鳥たちは口々に王子の異変を囁きながら小人たちへと知らせに飛びました。

大慌てで戻った小人たちが見たものは　小屋の床に眠る王子の姿でした。

王子は　叩こうが揺そうが大声でその名を呼ぼうが  
全くその瞳を開こうとはしませんでした。

ただ　ただ静かに　穏やかな寝息をたてて眠り続けているのです。

小人たちは床に転がった毒リンゴを見つけると　魔女の仕業と知りました。

悲しみに涙に暮れながらも　王子をガラスの寝台に横たえて  
その周りを美しい花々で飾り　毎日眺めては涙をはらはらと零して  
過ごしました。

魔法を解く術は判らず

眠れる姫を優しいキスで目覚めさせるハズのその王子が眠っている  
のでは

誰のキスも期待できず　ただただ日は昇り　そして沈んでゆきました。  
た。

ある日の夕方

その森にしては珍しく　満天にわかにかき曇り　激しい雷雨が襲って  
きました。

ガラスの寝台を守ろうと小人たちが駆け寄ろうとしたその時  
真っ暗になった空に白い雷鳴が轟き ひとつの大きな黒い影が森か  
ら現れました。

大きな黒い影は迷わず ガラスの寝台へと近づくと  
あっという間に 王子を抱きかかえそのまままた森の奥深くへと  
飛び去るように消えていってしまいました。

全てが一瞬の出来事でありました。

小人たちは 黒い影の後を追うこともできず  
ただ果然とその後ろ姿を見送ったのでありました。

王子は優しく唇に触れる何かの感触に柔らかなまどろみの中へ呼び  
起こされました。

覚醒しきれない意識の中で 王子は静かにその瞳を開きました。  
しかし その瞳には王子の唇に触れた誰かは映りませんでした。  
誰もいない部屋

そこは高い天井に古めかしいシャンデリアの下がる  
見たこともない部屋の中でした。

王子は自分がふかふかと心地よい 上質のシートにくるまれて  
足高な豪華な寝台に寝かされている事に気がつきました。

ここはどこなんだろうか・・・自分は一体どうしたのだろうか・・・

王子はふと自分があの老婆からもらったリンゴを嚙った後の記憶が  
ない事に

思い至りました。そして小人の小屋にもいないということ・・・。

よもや またあの二人の兄に連れ戻されてしまったのではないか  
ふと浮かんだ思いに王子は恐怖にかられました。



いてもたつてもいられず　王子は寝台から起き出すと　部屋の扉へと向かいました。

背の高い立派な扉は　ぎいと小さく鳴って外側へと開きました。王子はおそろおそろ廊下へと足を運びました。

そこは　紅い絨毯の敷き詰められた長い長い廊下でした。廊下の両側には立派な額に縁取られた絵画が掛けられ所々に灯る燭台の炎が小さく揺れておりました。

薄暗い廊下をおそろおそろ進んでゆくと　一つの扉の内側から賑やかな笑い声が聞こえてきました。

まるでお化け屋敷のように静まりかえった薄暗い廊下とはとても対照的な賑やかな笑い声と　混ざる歌声に誘われて王子はその扉をそつと押し開きました。

「目が覚められたのですね」

突然背後からかけられた穏やかな声に　王子は飛び上がる程に驚きました。

振り返った王子は再度　その瞳を大きく見開いて驚きました。

王子に声をかけてきたのは　背の高い立派な柱時計だったのです。柱時計はまるで人がするかのように　かるくその中程から腰をおるようにして

王子に深く一礼をのべて　重ねて穏やかな声で言いました。

「驚かれるのもムリはありません　私は以前この城で執事をしていた者です」

「・・・城・・・執事・・・？」

「はい・・・訳あって　この城は人の形を奪われた者たちが暮らしております」

「人の形を・・・奪われた・・・？」

「皆　心根の良い者たちばかりです　ご安心ください　我が城の主

がお連れになった  
お客様です 心から歓迎させて頂きます どうぞお入りくださいませ」

そういつて 柱時計は王子が開きかけた扉を大きく開くとその中へと王子を迎え入れました。

そこは 広々としたダイニングでした。  
そしてそこでは 数々の食器たちが躍り歌いながら見事な食事の支度を

整えている真つ最中でありました。

王子は目の前の光景に 驚きを隠せず ただただ目を見開いておりました。

そんな王子の足元に 小さな燭台が歩み寄ると言いました。

「ようこそ我らが城へお越し下さいました どうぞおかけ下さい」  
そう言つて 長く立派な食卓の一つの椅子を引いて王子へ勧めました。

王子は何が何だか判らないままにも 勧められた椅子に腰を下ろしました。

柱時計が号令をかけると それまで賑やかだった食器たちが一斉に静まり

王子の前に 次々と素晴らしく良い香りを漂わせた料理たちが運ばれて来ました。

暖かく おいしい料理の数々にもてなされ

王子は自分が身体の中から癒されてゆくのを感じました。

人の形を奪われた者たち

そう紹介された城の中で動き回るモノたちは皆 一様に心優しくそして親切に王子をもてなし歓迎してくれました。

王子は どこにあるとも知れない なぜ自分がここにあるのかも判

らない

そんな城の中で なぜか今までに感じた事のない安心感に包まれている事に驚きました。

王子は 城のモノたちにこれまでの出来事を全て話して聞かせました。

柱時計の執事もまた この城に起こった出来事を王子に話して聞かせました。

その昔

この城には王子と歳が変わらない若き王子が暮らしておりました。

その王子は若く自信に満ちあふれ 立派な体躯にも恵まれ 理性も知性にも溢れた立派な王子だったそうです。

しかし 王子は自身の溢れる力と権力にやや思い上がっていたのだといえます。

若くはなかなかにハンサムな面差しであったこの王子は 近隣の国の姫たちからの求愛をことごとく切り捨てて

いつか運命の人が現れるのを待つのだと豪語していたのだそうです。

そんな 勝手気ままな王子の元へある日 美しい一人の姫が現れたそうです。

その姫は 自分こそが王子の運命の相手だと名乗り

王子との婚約を迫ったのだそうです。

しかし いくら美貌の姫とはいえ 素性のしれない女の言うことなど聞けるはずがないと 王子はその姫を無碍に城から追い出してしまったのだそうです。

自分は誰も愛さないとまで言い切って。

王子の元へと現れた美しい女の正体は 王子に恋してしまった北の魔女でした。

北の魔女は王子に無碍に扱われた事に腹を立て  
本当の愛を知ろうとしない王子に我慢がならず  
城に呪いの魔法をかけてしまったのだそうです。  
人の形を奪い 深い森の奥に閉じこめて 王子の身にもまた恐ろし  
い呪いをかけて……

「その王子様は今 どこにおられるのですか？」

柱時計の話をうけて王子は尋ねました。

時計は応えて言いました。

「決して人前に姿は現されません……どうか我らが王子をお許し  
下さい」

「許すも何も 僕はこんなによくして頂いて皆さんに感謝している  
んです

きつと その王子様も こんなに素晴らしい家臣の民様に愛される  
素晴らしい方なのでしょう 僕はいつかお目にかかってみたいと思  
っただけです」

柱時計ははらはらと涙を零しながら言いました。

「今までお迎えした方たちの中で 貴方様ほどにお優しいお言葉を  
かけて

下さった方はおられませんでした……我らが王子が救われる事  
を祈っております」

「……救われる？」

「どうかお気になさらないで どうかここでの滞在を楽しんでいっ  
て下さい」

それだけを言うと柱時計は静かに部屋を出て行きました。

### 3・美女と野獣（後書き）

感想・ご意見など頂けますと励みになります  
久しぶりなのでドキドキしております  
皆様のお声をお聞かせ下さいませ  
よろしくお願い致します

#### 4・野獣の正体

##### 4・野獣の正体

王子はその夜 眠れないままに部屋の天井を見上げ  
この城の王子の事を考えておりました。

どのような呪いをかけられているのか 柱時計は話してはくれませんでした。

それでも おそらくは 人の形を奪われている それに間違いはないでしょう。

そう思い至ると 王子はその哀れな王子が気になって仕方がありませんでした。

自分とは境遇は違うとはいえ 同じ王子の身分でありながら  
やはり 哀しい運命をめぐるうとしてゐる者同士

出会えたら 話をする事ができたなら 何かを解り合えるかもしれない……

王子はぼんやりとそんな事を考えておりました。

そんな王子の部屋の扉が 音もなく静かに開き  
大きな黒い影が王子のベッドに近寄ってきました。

王子は咄嗟にその気配に気づくと瞳を閉じて 眠ったふりをしました。

黒い影は眠る王子の傍らに膝をつくと その美しい顔を覗き込みました。

そして静かにその唇にそつと自らの唇を重ねました。

柔らかな感触に 思わず瞳を開けそうになるのを堪えて  
王子は影が立ち去るのを待ちました。

影は小さなため息をひとつ漏らすと 静かに立ち上がり

音もなくまた扉から出て行きました。

王子はベッドから飛び起きると 急いで影の後を追いました。  
なぜか あの影こそが この城の王子だと思えてならなかったのです。

王子は廊下に出ると 静かに黒い影の後を追いました。  
影は王子に気づく事もなく 廊下を進むと長い階段を上り  
城の塔へと向かってゆきました。

そこは あの柱時計に そこだけは決して行つてはいけな  
いと強く言い含められていた場所でありました。

一瞬の躊躇の後 王子はためらいをふりきるようにして  
黒い影の後を追ひ 城の塔へと続く階段を登り始めました。  
長い長い階段の先には 一つの扉がありました。

王子は黒い影がその扉の中へと消えるのを確認して  
自分も後に続けました。

扉を静かに押し開くと 中は窓からの月明かりで白く照らされて  
ぼんやりと家具の影が浮かんで見えました。

王子は意を決して 静かな声で言いました。

「私をこの城に招いて下さってありがとうございます

僕は あなたと是非お話がしてみたいのです どうかお姿を  
見せては頂けませんでしょうか？」

すると部屋の奥から低い唸り声が応えました

「私の姿を見たら あなたは怯えて逃げ出してしまうに違いありま  
せん

今のまま どうかこのままこの城に滞在してはくれませんか？」

王子も応えて言いました。

「私はこれまで 姿形ではない醜く恐ろしいものに出逢ってきました

だから あなたの外見など何の意味もない事です  
私をこうして暖かく迎えて下さった貴方はきっと良い人だと思うの  
です」

低い唸り声がまた言いました

「私は 貴方が森の奥深くへと捨て置かれた時から貴方を見ており  
ました

貴方の心の痛みは私の痛みに強く共鳴したのです・・・だから・

」

「だから 僕を毒リンゴの苦しみから救ってくださったのですね」  
「・・・貴方と・・・話をしてみたかったです」

そう言うと 部屋の奥から黒い影はのっそりとその姿を現しました。  
それは どこか水牛を思わせる風貌の背中に大きなこぶを持ったケ  
モノでした。

ケモノの黒い毛皮に覆われた姿に不釣り合いに  
その口元だけは人間の唇のままでした。

それだけに 一層不気味にグロテスクに思われるその姿に  
王子は正直とても驚きました。

それでも 王子の気持ちは変わりませんでした。

「姿を見せて下さってありがとう 私は貴方に感謝しています」

「私のこの姿は自分の思い上がった気持ちへの罰です 仕方のない  
事なのです」

寂しげに呟くケモノの手を王子はそつと握りました。

「どうにかして この呪いを解く方法はないものでしょうか？」

「方法は・・・もう・・・もういいのです もう」

そう言うと ケモノは寂しげに微笑んで見せました。

目元が ほんの少し人間らしく見えたのです。



その日から ケモノは王子の前にその姿を見せるようになりました。  
一緒に食事を共にとり 城にある多くの蔵書をめぐって意見を交わ  
したりもしました。

王子はケモノの深い知性と今ではすっかり反省し改心したのであろう  
優しげで潔いその性質に 深く惹かれてゆきました。

王子とケモノはまるで昔からの親友同士のように語りあい笑いあつて  
過ごしました。

柱時計をはじめ 城の他のものたちがそれを涙をこらえて見守つて  
おりました。

嬉しそうに・・・そして哀しそうに。

#### 4・野獣の正体（後書き）

感想・コメントなど頂けますと励みになります  
よろしくお願い致します

## 5・野獣の運命

### 5・野獣の運命

どの位の日々をその城で過ごしたのでしょうか。

王子はすっかりとその暮らしに馴染み その城での生活を心から楽しんでおりました。

ケモノと語り合う時間は時を忘れさせ その外見をも忘れさせるものでした。

しかし 王子はここ数日 ケモノの様子がおかしいことに気づきました。

どうにも食欲がなく 元氣も日になくなってゆくのです。

心配になった王子は我慢できず ケモノにつめよりました。

大丈夫だから とばかり言って 王子から逃げようとするケモノの腕を掴み

王子はその瞳をじっと覗き込むようにして尋ねました。

「どうしてしまったのですか？ 何が貴方を虫食んでいるのですか？ 私に・・・僕に出来ることは何もないのですか？」

王子の必死の訴えに ケモノは唸るようにして低い声で応えました。

「次の満月が私の命の最期と定められているのです・・・」

「・・・なんですって！」

「北の魔女のかけた呪いは 本当の愛を私が知った時解かれる そう言われました

本当の愛を知り 心を許しあい その相手との口づけを交わし愛を交わし合った時

この姿から元の姿へと 城の者たちも皆 戻れると・・・そう言われています

そのリミットが 次の満月なのです」

王子は言葉を失いました。

今の今まで聞いていなかった事実でした。

王子は混乱して言いました。

「どこか近隣の国か城に年頃の姫はいないのですか？

村人の娘でもよいのでしょうか 誰か貴方の事を愛してくれる娘を捜さなくてはっ！

どうか 貴方の命がむざむざと消えてゆくなんて僕には見てもらえない

誰か 誰か僕が探し当ててみせるからっ！！」

そんな取り乱した王子の姿に ケモノは優しく微笑んで言いました。

「ありがとう 私のためにそんなにも思ってくれて・・・

それだけで十分です それに こんな私を愛してくれる娘はいなかった

今まで城に攫ってきた娘の数はもう覚えていない

それでも 皆 私の姿を見て逃げ出していつてしまった・・・

私にしても もう誰も愛せるとは思えないのです」

全てを受け入れて 諦めてしまったかのようなケモノの姿に

王子は全身が震える程の思いにかられておりました。

自分が何とかしてみせる どうかこのケモノの命を長らえてみせると。

しかし王子の思いもむなしく 時間だけが残酷に過ぎてゆきました。もう 明日には月は美しくその姿を丸く整えてしまうのです。

王子は涙に濡れた顔で 弱りベッドに寝たきりになってしまったケモノの

手をとって言いました。

「僕が女の子だったらよかったのに・・・本当に女の子だった

ら・・・

貴方を救う事が出来たかもしれないのに・・・貴方を失うのがこんなにも辛い

僕は貴方を心から愛しているのだと思う」

母を失い 父を失い 母と慕おうとした継母から忌み嫌われ

せつかくできた兄弟と喜んだ兄たちからは陵辱の限りを尽くされた誰も信じられない 誰にも心など許せない

それ程に傷ついた王子の心を ケモノとこの城の者たちは癒してくれた。

王子は ケモノの優しさと知性とその性質に深く惹かれていたので。

ケモノは王子の告白に ベッドの上にゆっくりとその半身を起こしました。

「ありがとう・・・こんな私にそこまでの気持ちを寄せてくれて・・・

私も心から貴方を愛している 大切に想っている

貴方を一目見たあの時から 私は貴方に恋をしていたのだと思う」

そういつて ケモノは王子の手をとるとその甲にそっと口づけしました。

そして こんな城へと攫ってきた事を心から申し訳なかったと王子に詫びました。

震えるようにその口づけを受けた王子は

思い切ったように ケモノの唇に自らの唇をそっと押し当てました。涙が頬を伝ってケモノの頬も濡らしました。

「貴方を・・・失いたくない」

王子の言葉がケモノの耳を震わせたその時でした。

窓の外が真昼のように明るく白く煌めくと 花火のような煌びやかな光が舞い散りました。

そして その光がケモノを包み 王子の目の前でそれは起こりました。

ケモノの姿が はらはらとその毛皮を脱ぎ捨てるように  
見る見るうちに 一人の美しい青年へとその姿を変えていったのです。

目を見張るその光景に 王子はただ圧倒され その場に座り込んでおりました。

薄暗く 蔦に覆われていた城は見る間に真っ白な輝くような美しい姿へと変わりゆき  
城のあちこちでは 人の形を奪われた者たちがその元の姿へと戻っておりまして。

お互いの肩を叩き合い この奇跡に涙して ただ喜びあっております。

塔の上では  
美しくも精悍な若者へと変貌を遂げたケモノを前に 王子はただその目を見開いておりました。

ケモノであった若者は信じられないといった表情で 己の両手を見つめ

それが黒い毛皮に覆われていない事実にまた目を見開いておりました。

しばらくの間 二人は言葉もかわさず ただ呆然と見つめ合っておりまして。

先に口を開いたのはケモノであった若者の方でありました。

「……王子……貴方を抱き締めてもいいだろうか？」

王子はその声に我に返ったようにふるりと頭をふると 艶然と微笑

んで応えました

「私が 貴方を抱き締めたいと思っているのに」

二人は重なるようにして抱き合うと深くその唇を重ねました  
もどかしくお互いの服を脱がせあうと その肌の全てを重ねんとす  
るかのように

深く強く抱き合いました。

初めて触れ合う人としてのぬくもりに 二人は同時に小さな吐息を  
もらしました。

合わせた胸が高まる鼓動にあわせて上下する。

どちらからともなくその唇を求め合い深く舌を絡め合うと二人の唾  
液が混じり合い

こぼれ落ちたそれを追うようにケモノだった若者は王子の首筋に舌  
を這わせました。

白く滑らかな肌を味わうように若者は王子の肌に唇を滑らせました。  
王子の胸元にささやかに尖った珊瑚色の突起にもその唇は触れまし  
た。

王子は堪えきれずに小さな声をあげました。

甘く優しく転がすように舌で弄ばれ 齒を軽く立てられると  
王子は身をよじるようにして若者から逃れようしました。

その身体を深く抱き戻すと 若者は王子の身体を深く深く強く抱き  
締めました。

飽きることなく その身体の隅々までも唇を這わせました。

王子は身を任せ その愉悦の波にのまれてゆきました。

## 5・野獣の運命（後書き）

感想・ご意見など頂けると励みになります  
よろしくお願い致します



## 6・眠れる森の美女

### 6・眠れる森の美女

人間の姿を取り戻した若者は王子を心から愛しておりました。

王子もまた ケモノであつたこの若者を同じ王子という身分でありながら

お互い信じがたい経験をした者同士と言うことも含め 心から信頼し愛おしく思つておりました。

城の者たちも この二人のゆるぎない愛を受け入れ見守つておりました。

愛し合う二人はまさに蜜月ともいえる日々を過ごしておりました。

昼となく夜となく お互いの身体を求め合う事にも何の恥じらいもなく

一時をも離れてはいたくないとでもいうように睦み合い 唇を重ねておりました。

王子は 二人の兄からつけた陵辱の傷を若者と抱き合う事で消し去ろうとするかのように

自ら望んでその昂ぶりを受け入れておりました。

お互いの昂ぶりを重ね合い 一纏めに若者の手によつて扱かれる快感も

後孔の奥に潜む愉悦の泉を擦り突き上げられる喜びも

王子は貪欲に求め 自らのしなやかな肢体を若者の前に差し出しておりました。

若者もまた これまでに感じたことのない満たされた喜びを覚えておりました。

二人の幸せはこのまま永遠に続くものと思われておりました。

しかし

この二人の幸せな日々を快く思わない者がおりました。

それは 若者をケモノにかえたあの北の魔女その人でありました。

北の魔女は ハンサムで精悍なこの若者に秘かに恋心を抱いておりました。

そしてそれが叶わないと知り 王子である若者を誰にも渡すまいと醜いケモノの姿に変え 城にもまた呪いの魔法をかけたのでありました。

その北の魔女が 王子の愛によってケモノにされていた若者が元の姿を取り戻し

あまつさえ その王子と蜜月の日々を過ごしていると知ると

たまらない焦燥感と嫉妬心にその心を燃え上がらせておりました。

いてもたってもいられず 元の姿を取り戻した若者の城へと烏に姿を変え

様子を伺いにきた北の魔女は

その高い塔の部屋の窓から睦み合う二人の姿をみとめ 悔しさに醜い声で大きく鳴きました。

二人は窓の外でなく烏の不気味な鳴き声に ふと視線を外へと向けたものの

やがてはお互いの温もりに夢中になってゆきました。

北の魔女は美しい王子に激しい嫉妬心を燃やしておりました。

そして 北の魔女は王子の継母である魔女へと王子の居場所を知らせたのでありました。

継母である魔女は王子の無事を知ると唇を噛んで悔しがりました。

そうして 二人の息子に言いつけて

今度こそ 王子の息の根を止めてくるようにと送り出したのでありました。

どんな手をつかってもよい

王子にどんなマネをしてもよい　そう二人の息子に言い含めて・・・。

二人の兄たちは　深い森の中を　北の魔女に導かれて　かのケモノであつた若者の城へと

辿り着きました。　二人は旅の若者に姿を変え　城の扉を叩いたのでした。

気の良い城の住人たちは二人を快く招き入れ　手厚くもてなしました。

王子も若者もまた　その二人がかの兄たちであるとはつゆとも気づかず

穏やかに言葉をかわし　二人をもてなしたのでありました。

一夜の宿をと無心した二人の兄を若者をはじめ城の者たちは暖かく迎え入れました。

それが　恐ろしい事件のはじまりになるうとは思ひもよらず・・・。

その夜　若者と床を共にしていた王子はふと夜中に人の気配に目を覚ましました。

見れば枕元には二人の旅人の姿がありました。

何事かと尋ねようと身を起こした途端　王子は攫い取られるように抱き起こされ

二人の旅人が用意してきた大きな麻袋へと押し込められてしまいました。

魔女の用意した眠りの粉を兄たちにふりかけられていた若者は　愛する王子が攫われてゆく騒動にも目を覚ます事ができませんでした。

こうして 王子は再び 嫌悪してならない二人の兄の手に落ちてしまったのでありました。  
二人は王子を軽々と抱え上げると 城の者たちに気づかれないうちにそっと足音を忍ばせ  
城を出ると 深い森の奥へと逃げ込んだのでありました。

北の魔女の城は深い森の奥のまたその奥にありました。  
二人の兄は王子をそこへと連れて行くと 北の魔女に差し出しました。

北の魔女はしげしげと美しい王子の姿を眺めると 忌々しげに小さな舌打ちをしました。  
憎い恋敵がこれほどにも美しい青年であつた事に 心の底から憎悪の炎が燃え上がりました。

## 6・眠れる森の美女（後書き）

感想・コメントなど頂きますと今後の励みになります  
よろしくお願い致しますm（――）m フカブカ

## 7・眠れる森の美女2

### 7・眠れる森の美女2

北の魔女は二人の兄に 王子を存分に陵辱しいましめ傷付けよと言いつけました。

二人の兄にとつてそれは天にも昇る程にありがたく嬉しい言いつけでありましたので

二人は何を戸惑う事もなく 王子の手足の自由を奪った縄もそのままに

王子が身につけていた衣類をことごとく剥ぎ取ってゆきました。

身をよじり 懸命に抗う王子の抵抗も虚しく 二人の兄は王子の裸体に目を輝かせました。

容易く好きにされてたまるかと 王子は渾身の力を振り絞り抵抗を繰り返しました。

しかし 身体の大きな二人の男に押さえ付けられるうち

後ろ手に縛り上げられた腕は鬱血し痺れ その感覚を失いました。

大きく左右に割り広げられて戒められた両脚の間に 長兄が屈み込み

王子の柔らかな桃色に艶めく屹立を舐めあげた時

王子は悔しさに涙を零しました。

愛する人との行為とは異なる 心ともなわないその行為は苦痛以外の何物でもなく

王子はただ その身体を開かれ 押し入られる異物感と不快感 そして嫌悪感に満ちて

心の中でただひたすらに若者の名を呼び続けておりました。

目を覚ました若者もまた 大声で王子の名を呼び その姿を捜して

おりました。

北の魔女の仕業と知ると 若者は剣をとり 愛馬に跨ると森の奥深い魔女の城を目指しました。

愛する王子をとりかえすため 若者は愛馬をかって走りました。

若者はまだ 王子が二人の兄から辱めを受けていようとは知る由もありませんでした。

若者が北の魔女の城へと向かってやってくる そんな知らせは見張りである森のコウモリたちによって

北の魔女へともたらされておりました。

北の魔女は二人の兄に王子を高い塔のてっぺんにある小さな部屋へと押し込めるよう命じました。

二人の兄はその小さな部屋の小さな寝台に王子を縛り付けると

飽きる事なく 代わる代わるにその美しい肢体に手を這わせ唇を寄せておりました。

繰り返される兄たちの執拗な愛撫と陵辱に 王子の心は次第に現実からの逃避を始めました。

理性と意識を保っていては 心が壊れてしまう

自分を守ろうとする心の働きだったのでしょうか いつしか王子の美しい薄茶色の瞳には

白くばやけた膜がかかったように濁り その紅く柔らかな唇はぼんやりと開かれたままになりました。

透き通るように白く美しい王子の肌には 兄たちのつけた桜色の花びらのような痕が散り

拘束された綱の痕が痛々しく赤紫に残っておりしました。

されるがままに その肢体を投げ出した王子にそれでも舌を指を手を貪欲に這わせる兄たち

北の魔女は呆れたように二人を好きにさせておきました。

愛馬を駆つて北の魔女の城にたどり着いた若者は 城の入り口で大きく叫びました。

「我が愛する者を返してもらいたい そちらの望みはなんだっ！」

若者の叫び声に応えて 北の魔女が言いました

「そちの願いに応えるつもりはない かの王子は私の手に落ちたもうその心も壊れ果てた」

魔女の声に若者は言葉を失いました。

愛する王子が心を失っている？ 若者は無我夢中で城の扉を蹴破り城の中へと馬を進めました。

対峙した北の魔女と若者は 城の階段の上と下で睨み合っておりました。

北の魔女はそれでもまだ若者への恋心を諦め切れてはいませんでした。

それでしたので 魔女は若者に交換条件を出しました。

「王子を返して欲しくば わらわと婚約の儀を交わすがよい さすればかの王子の命だけは

救つてやらぬこともない しかし 二度とわらわの目の届く所には置かぬ」

若者は胸をはって応えました

「さすれば力づくでも奪い返すまで そなたごとくと結婚の誓いを交わすつもりは毛頭ないわ」

若者の言葉に北の魔女は怒りにかられ我を忘れました。

我を忘れた北の魔女はその姿を美しい乙女の形に保つことも忘れ本来の己の姿である醜いドラゴンへと変貌したのでありました。

その真つ赤な口から吐き出されるたまらない臭気と炎をかくぐり若者は剣をふりかざして北の魔女へと立ち向かいました。

北の魔女は塔のてっぺんへと駆け飛び上ると二人の兄を盾に王子の傍らに立ちました。



追い縋った若者は二人の兄を相手に闘いました。

剣をうちかわし 若者は死闘の末に二人の兄を切り倒しました。

しかし 王子はドラゴンである北の魔女に囚われており その首筋に鋭い爪をあてがわれ

少しでも近づけば王子の喉をかき切ると凄みのきいた声で囁かれま  
した。

若者は為す術もなく 見るも無惨に陵辱の痕を色濃く残した王子の  
姿を見つめておりました。

痛々しくも傷つけられた王子 それでも気高いその美しさを失って  
はいませんでした。

若者は うなるように剣を投げ捨てました。

そして北の魔女であるドラゴンに呻くように言いました。

「王子を離せ・・・俺の命をくれてやる だから王子を自由にし  
てくれ」

ドラゴンは目を煌めかせると言いました。

「そちを手にいられるのなら こんな王子などに何の未練もないわ  
ここへきて愛を誓うのだ 北の魔女のモノになると誓うのだ」

北の魔女は高く笑うとその姿を再び美しい乙女のそれに変えました。

若者は静かに北の魔女の近くへと歩み寄ると その白い手を取り頭  
をたれて口づけました。

満足げに微笑んだ魔女が王子をその手から離れた瞬間を狙い

若者は隠し持っていた小刀で北の魔女の喉を突きました。

青緑色のネバネバとした血を流しながら 突き立てられた小刀を握  
りしめ

北の魔女は苦しげに言いました。

「おのれ・・・憚ったな・・・つく・・・う・・・」

よろよろと若者に掴みかかろうとする北の魔女を若者は更に拾い上

げた剣で貫きました。

狭い塔の小部屋に 北の魔女の絶叫が響き渡りました。

「おのれ・・・許さぬ・・・決して許さぬ 金輪際王子が目覚める事はない

おのれの愚かさを憎むがよい 一人でむざむざ死んでなるものか  
王子の魂はもらってゆくっ!!」

「・・・つく な・・・なにを・・・!」

若者が必死にすぎるもむなく 北の魔女はその最期の力を持って  
王子に呪いをかけました。

塔の小窓から身を投げるようにして落ちていった北の魔女を追いも  
せず

若者は 床に倒れ込んだ王子を抱き起こしました。

「王子!王子っ!目を覚まして・・・目を・・・」

若者の悲鳴にも似た叫びにも 王子は目を覚ましませんでした。

## 8・眠れる森のその奥で

### 8・眠れる森のその奥で

まだ魔法だの妖精だのが当たり前のようにあつた時代のお話です。  
とある深い緑の森の奥のまたその奥に

蔦に覆われた古いお城がありました。

その小さな塔のてっぺんにある 小さな部屋の寝台に  
眠り続ける それはそれは美しい王子がおりました。

### 昔々 その昔

王子を愛した若者が 北の魔女を殺しました。

若者に恋をしていた北の魔女は若者と王子の相愛を妬み  
命を落とす最期の最期に恋敵である美しい王子に呪いをかけました。

二度と目覚める事のない眠りにつくと 呪いをかけました。

愛する王子 眠り続ける王子 美しいままの王子

若者は年老いて命を全うするまで この森の奥の城で眠れる王子を  
見守って暮らしました。

眠り続ける王子は その美しい白い肌も うすく色づく薔薇色の頬も  
うつすらと口づけをまつかのように紅く柔らかくふつくらとした唇も  
長い睫に縁取られた優しげな目元も  
何一つ変わることがありませんでした。

若者は 幾度となくその唇に己の唇を重ね その身体を掻き抱きま  
した。

愛をささやき 愛を誓い その瞳が再び開かれることを祈り続けま  
した。

しかし 若者の願いが叶う事はなく  
いつしか若者は年老いてその人生を終えました。

いつの日か 再び命を得たその時には  
必ずや 王子を目覚めさせてみせると その愛を胸に深く刻み  
かつて若者だった老人はその最期の時を迎えたのでありました。

美しい王子は眠り続けました。

その夢の中には いつまでもかわらず愛しいケモノであった若者の  
姿が

ありました。 若者への愛を胸に 二人の兄からの陵辱の記憶から  
逃れ

王子は眠り続けました。

いつかまた 若者の腕の中で目覚めることを信じて。

誰もいなくなった城の中

美しい王子は 眠り続けました。

遠くて深い緑の森の奥 そしてそのまた深い奥

いまでも 蔦に覆われた城の塔には かの美しい王子が眠るといふ。

昔々のお話

## 8・眠れる森のその奥で（後書き）

感想・コメント等 お寄せ頂けますと励みになります  
よろしく願いいたします

今しばらく 続きます お付き合い下さいませ

## 9・ラプンツェル

### 9・ラプンツェル

昔々のお話です

在るところに深い深い緑の森がありました。

その森の奥深く　ひとつのお城がありました。

蔦に覆われたそのお城には　小さな高い塔がありました。

その塔の小さな部屋には　美しい王子が眠っております。

昔々その昔

この小さなお城には精悍で凛々しい若き王子が暮らしておりました。  
若き王子は北の魔女からの求愛を無碍に断り相手にもしませんでした。  
た。

そのため　魔女から腹いせにひどい魔法をかけられました。

醜いケモノの姿にされていた若者を救ったのは

一人の年若き美しい王子でした。

美しい王子もまた　哀しい生い立ちを背負っております。

お互いの苦境を語り合い　知り合ううちに惹かれ合い

二人の王子は恋におちました。

ケモノにされていた若者は美しい王子の愛により

もとの人間の姿に戻る事ができました。

愛し合う二人の仲を妬んだ北の魔女は

再び二人の仲を裂こうとしました。

死闘の末　北の魔女を倒した若者でありましたが

美しい王子は魔女の最期の呪いによって

永遠に眠り続ける事になりました。

眠れる美しい王子を愛した若者は  
眠れる美しい王子を見守って  
その天寿を全うしたのでした  
いつの日か 再び命をうける事があれば  
必ずや 眠れる美しい王子を目覚めさせてみせる  
と 固く心に誓って……

そうして

いったいどれだけの月日が流れたのでしょうか  
深い深い森であつた城の周りにも 随分と文明という名の  
触手が伸ばされてきたある時代

もう 魔法も妖精もすっかりとその姿を消して久しく  
魔女たちも人間とは住まう場所を隔ててしまいました。  
そんな月日の流れにも  
美しい王子の眠りが妨げられる事はありませんでした。

そして王子が眠りについてから数え切れない夜を越えたある日  
それは突然にやってきました。  
蔦に覆われた城に 一人の若者が訪れたのです。

海を越え 遙か遠い国から訪れた若者は  
伝説にきく 眠れる美しい王子を捜してやってきたのです。  
若者の国に古くから伝わる伝説では  
ある国の深い森の奥にある城に 美しい王子が眠っている  
そして その王子の眠りを解いたものには  
永遠の幸福が訪れる と言い伝えられておりました。

若者は魔法も魔女も妖精も 何一つ信じてはいませんでした。

ましてや 数百年も眠り続ける美しい人の話など  
まるで信じてはおりませんでした。

しかし 忘れ去られて朽ちかけた古い城を探し出す事は  
若者にとって旺盛に溢れる好奇心を満たす  
絶好のレクリエーションだったのです。

そうして この若者は見事 眠れる森のその奥にある城へと辿り着  
いたのです。

若者は持参した手斧をかって 深く緑の蔭に覆われた入り口へと  
道なき道を切り開いてゆきました。

ようやく固く閉ざされた城の入り口へと辿り着くと

若者はためらうことなくその大きな扉を押し開きました。

伝説にきく北の魔女の城に間違いないと知らしめる

大きな紋章が朽ちかけた城門にかかげられておりました。

若者は満足げにそれを眺めると 迷わず城の中へと足を踏み入れた  
のでした。

若者は小さな塔へと続く階段を探し出しました。

急な狭い階段を 一步一步踏みしめて若者は塔の上へと登ってゆき  
ました。

ここまできても 若者は この先の小部屋に数百年の時を経て  
眠り続ける美しい人がいるなどとは 露ほどにも信じてはおりませ  
んでした。

ただ 何か隠された財宝かささやかな宝物でもあるのではないか  
そんな小さな期待だけを胸に階段を登り続けました。

ただ 伝説にきく北の魔女の城が実在した事に十分な興奮を覚え  
すでに気持ちは大いに満足していたのでありました。

ようやくに 長い階段を登り終えると そこには小さな扉がありま



した。

若者はそつとその扉に手をかけました。

扉は音もなく開きました。

若者は蜘蛛の巣を払いながら身を屈めるようにして  
小さな扉をくぐりました。

そして

若者は我が目を疑いました。

そこには 華奢な寝台に身を横たえる 美しい人の姿がありました。

## 9 ラプンツェル（後書き）

もう少し続きます（笑）  
お付き合い下さいませ

## 10・ラプンツェル 2

### 10・ラプンツェル 2

若者はあまりの驚きに　しばらくはそこに立ち尽くしておりました。  
それほどに

間近に見れば見るほどに　その眠れる人は美しかったのです。

艶やかな黒髪に囲まれた小さな顔は

陶器のような滑らかな肌に薄薔薇色の頬

長い睫はその頬に影を落とし

細い鼻梁に続く唇は紅くふつくらと見るからに柔らかそうでした。

若者はその美しい人から目を離す事ができなくなってしまいました。

ふらふらと　その傍らまで歩み寄り跪きました。

そして　その紅くふつくらと柔らかげな唇に

吸い寄せられるように自らの唇を重ねました。

それはまるで天にも昇るような幸せな感触でした。

しかし　若者のキスで美しい人の瞳が開かれる事はありませんでした。  
た。

若者は自分の住む国へと　この美しい人を連れて帰る事を決意しました。

一目見て　この美しい人に心を奪われてしまったのです。

二頭立ての馬車を用意し　座席には美しい人をゆつたりと横たえられるだけの

クッションを用意しました。

若者は　狭い塔の階段を慎重に　美しい人を抱きかかえて降りました。

美しい人の身体はほっそりとして　まるで羽毛のように軽やかでした。

若者は夢心地のままに馬車を走らせ　長い帰途につきました。

遠い故郷へむかう旅路

若者は夜を過ごす宿でも　美しい人のためにも寝台を用意させました。

どこの宿の主にも　特殊な病で寝たきりなのだと説明しました。

怪訝そうな顔で悪い流行病を持ち込まれては困ると洩る宿主たちもその美しい人の寝顔を一目見ると　愛想良く部屋を貸してくれました。

若者はそうやって長い旅路を経て　故郷へと帰り着きました。

懐かしい我が家に辿り着くと　若者は美しい人を自分の寝台へと寝かせました。

その柔らかな黒髪の乱れを整え　濡れた布でその肌を清めました。まるで等身大の美しい人形のような眠れる王子の姿は

どれだけ眺めても飽きる事がなく

若者は夜となく昼となく　美しい人を見つめて過ごしました。

若者は最初　その美しい人に寝台を譲り　自分は床に毛布を敷いて眠りました。

毎朝　そして眠りにつくその前に　美しいその人に口づける事が若者の日々の習慣になりました。

そうやって過ごすうちに　若者はどうにも我慢ができなくなりある夜　美しい人の傍らに自らの身体を横たえました。

そのすべやかな肌に手を伸ばすと　それはまるで掌に吸い付くようにしっとりとして滑らかで　ほんのりと暖かく夢のように心地よい手触りでした。

若者は眠れる王子の胸元をはだけると　その珊瑚色の突起をそつとつまびくように弾きました。

それが小さく芯を持ち固く尖ると　若者はその誘惑に負けそつとそこへ唇を寄せました。

舌で転がすように舐め遊び　その華奢な首筋には甘く齒を立てました。

次の夜には　若者は王子の肌を清めるためと自分の心に言い訳をして王子の衣服を全てとりさりました。

若者の目の前に晒された王子の裸体は　とても同性のそれとは思えない程に

艶めかしくも美しく　人の心を惑わせるものでした。

若者は濡れた布でその身体のすみずみまでを清めました。

そして　どうしても我慢することができず

若者は眠れる王子の柔らかな屹立に手をのばしました。

頬を寄せるようにしてそこへ触れました。

そつと口づけるようにしてそれを口に含むと　王子のそれはやんわりと形を変えました。

押さえきれない衝動に駆られて

若者は自らの昂ぶりを王子のそれと重ねると

一纏めに擦り扱きました。

ほどなく　たまらない愉悦の波にのまれて　若者は限界を迎えました。

とろりと吐き出された白濁は　驚いた事に眠れる美しい人のそれからも

真珠のように流れ出ておりました。

もう若者の理性はこの妖艶な肢体の前に留まる事ができませんでした。

若者は　眠れる美しい王子の後孔をやわやわと解すと

再びその形をかえた自らの昂ぶりをそこへ押し当てました。  
傷つける事のないように そつと そつとゆつくりと腰をすすめ  
若者は自らをすっかりと王子の中へと収めました。

きつく締め付けられて それでいてとろりと柔らかい感触に包まれて  
若者はこれまでに味わったことのない快感に身を震わせました。  
たまらず 眠れる美しい人を固く抱き締めるとその唇にキスをしま  
した。

そして 堪えきれずにその最奥を強く突き上げたその時でした。  
美しい人形のようなだった王子の身体がぴくりと震えました。  
驚いて若者が王子の顔を覗き込んだその時

閉ざされていた その大きな薄茶色の瞳がぱちりと開かれたのです。

若者は あまりの喜びにうちふるえ そのまま王子を固く固く抱き  
締めました。

不思議そうに若者の顔を見つめる王子の表情は 幼くもあり  
無垢な草食動物を思わせる優しい瞳がくると動きました。

若者は王子を深く貫いたまま 再びその唇を重ねました。  
そしてその耳元にそつと囁きました。

「愛しています 貴方を目覚めさせる事ができた私は世界一の幸せ  
者です」

されるがままに若者にその肢体を預けていた王子は  
ふと己のおかれた状況に思い至った様子で恥ずかしげに目を伏せま  
した。

そして小さな声で応えて言いました。

「僕を・・・僕を目覚めさせてくれてありがとう・・・」

若者の姿を認めた王子は すっかりと安堵してその身体を預けました  
若者は かつて王子が愛したあのケモノであった若者に瓜二つの容  
姿をしていたのです。

王子はそつと若者の背中に両手を回すと  
掻き抱くように強く抱き締め返しました。

二人は強くつよく抱き合い 同時に白い飛沫を解放しました。

目眩がする程の快感に 若者はしばらく王子を抱き締めたまま動く  
事ができませんでした。

## 10・ラプンツェル 2（後書き）

次回 最終話です

いましばらくお付き合い下さいませ



## 11：人魚姫

### 11：人魚姫

こうして 再び愛する若者と出会えた王子は 幸せな日々を過ごしました。

目覚めた王子は若者を助け その仕事を支え 若者は巨万の富を築きました。

若者の仕事はことごとく成功を収め 大いなる人望もあつめました。伝説の美しい人を目覚めさせたものは幸せになれる。

言い伝えの通りであつたと思った若者は王子を何より大切にしました。

若者の傍らには常に優しく微笑む美しい王子の姿がありました。

王子は何年を過ごしても その姿を変えることがなく どうやら歳をとる事がないようでした。

ひとり年老いてゆく若者は 幾度となく衰えてゆく自分を憂い 美しい王子を独占していてよいのかと弱音をもらしました。

その度に 美しい王子は艶然と微笑んでいました。

「僕は貴方のそばにずっといたいのです 貴方だけを愛します」と

年老いた若者はその財産の全てを貧しい者たちへ寄付しました

慈善事業にも熱心に取り組んだ若者は

多くの人達から慕われ 愛されました。

そうして いつしか 若者もその人生を全うする時を迎えました

多くの人に惜しまれて かつて若者だった老人は幸せそうな笑みを

浮かべ

美しく変わらぬ容姿のままの王子にその手をとられ

最期の時を迎えました。

老人が静かに息を引き取った時

王子の美しい大きな瞳から次々と涙が溢れて零れました。

いつしか 王子は白い泡に包まれたようにその姿を儚くし

涙の粒は真珠に変わって床にこぼれ落ちました。

翌日

葬儀の支度に訪れた村の人々が老人の眠る寝台に近づくと

そこに いつもかわらず老人に寄り添っていた

あの美しい王子の姿はありませんでした

ただひとつ 輝くように美しい 大粒の真珠が

横たわる老人に寄り添うようにひっそりと一粒煌めいておりました。

妖精も 魔法も魔女も 人間から遠く離れた世界にいつてしまった

時代

遠い昔の不思議な 美しい王子のお話

end

## 11・人魚姫（後書き）

「救いのないお話が書きたい」と思って  
書き始めた話でしたが やはりどことなく  
ハッピーエンド？にたどりつきました

感想・コメントなど

是非 一言で結構です 今後の励みになりますので  
お寄せ頂けたら嬉しいです

読んで下さってありがとうございます

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7780e/>

---

眠れる森のその奥で

2010年10月8日13時10分発行